

## 「物語の女」研究

——片山廣子との関わりを中心に——

山 崎 麻 由 美

堀辰雄は「物語の女」(「文藝春秋」昭和九年十月)について次のように語っている。

『物語の女』はその間に、唯一度、もうすつかり自分の抜け出したやうに見える最初の人生を振り返つて靜かにそれを見つめるやうな機會を與へられたとき書いたものである。そしてそれは私が自分自身ではない或物の裡に自分を置いて書かうと試みた最初の作品である。

(新潮社版「聖家族」序)(註①)

ここにいう「最初の人生」が「物語の女」の背景と考えられる。

堀辰雄の〈最初の人生〉は、大正十三年の夏の夏井沢に始まる。詩人室生犀星、作家芥川龍之介、アイルランド文学の翻訳家として名高い松村みね子(片山廣子)と娘總子らとの交流は、堀の文学に大きな影響を与えた。特に、片山廣子、總子との出会いは、(この村での數年前の彼女たちとの花やかな交際の思ひ出、ことにこの村で

の彼女たちとの最初の歎ばしい出會ひ)(『美しい村』と、堀の中では印象付けられており、「ルウベンスの偽畫」、「聖家族」、「物語の女」から、「菜穂子」、「楡の家」まで続く、母と娘のモチーフとの重要な関わりをもつ。

「物語の女」が、芥川龍之介、片山廣子、その娘總子をモデルとして書かれていることは多くの研究者によつて指摘されているが、堀辰雄は、なぜ、片山廣子をモデルにしたと思われる三村夫人を主人公とし、「物語の女」を書いたのか。芥川龍之介の晩年の恋人といわれ、(才力の上にも格闘できる女)(註②)とまで、芥川に書かした片山廣子とはどのような人物であつたのか。本人の手による年譜をここに挙げる。

年譜(註③)

明治 十一年 東京麻布に生まる。埼玉縣の人吉田二郎の長女。

明治二十九年 佐佐木信綱の門に入り作歌に志す。

明治三十二年 新潟縣の人片山貞次郎と結婚。

大正 五年 歌集「翡翠」を出版。同年ごろより鈴木大拙夫人に

アトリス指導のもとに初めてアイルランド文學に親しみ、爾來松村みね子の名を以て翻譯を事とし、次に歌から離れた。

片山廣子については、大正五年の項にある（松村みね子の名を以て翻譯を事とし）という翻訳家としての活動が、多く知られているようである。しかし、彼女は佐々木信綱を中心とする短歌雑誌「心の花」に、雅文、新体詩、歌、訳文を数多く発表している。芥川作品や書簡から、芥川龍之介の晩年の恋人として理解されているようだが、表現者片山廣子をも忘れてはならないだろう。

大正十四年、芥川龍之介、片山廣子とともに過ごした軽井沢の夏は、堀辰雄の文學に何を残したのだろうか。大正十四年の夏を軽井沢で過ごした堀は、義父上條松吉に多くの書簡を書き送っているが、後年、堀自らの手で父への手紙が整理されたときに附された「父への手紙」のメモに当時のことに触れている部分がある。

「父への手紙」のメモ

○その夏輕井澤に來た人達

室生犀星、芥川龍之介、松村みね子一家、萩原朔太郎妹さん二人、小穴隆一、佐々木茂索、ふさ

○芥川龍之介「或阿呆の一生」の倦怠、越し人歌「越し人」

○片山廣子「日中」

夏の末、片山夫人令嬢、芥川さんと一緒にドライブした折の作  
○堀「ルウベンスの偽畫」はこの夏のことを主材して美化して小説

化したもの

このメモから、芥川龍之介と片山廣子が、大正十四年の軽井沢の夏に欠かせない人物であったということがわかる。作家森於菟彦をめぐって、未亡人である三村夫人とその娘葉穂子との微妙な三角関係が、三村夫人の手記という形をとって描かれている「物語の女」の中には、その夏がどのように描かれることになったのであろう。まず、「物語の女」の内容で重要と思われる箇所を、芥川龍之介、片山廣子の伝記的事実と照合してみよう。

三村夫人が未亡人であること

・さうしてやつと私たちの生活も樂になりほつと一息ついたかと思ふと、こんどはお前のお父様がお倒れになつてしまつたのだ。お前の兄の征雄が十八でお前が十五のときであつた。（「物語の女」）  
・明治三十二年五月以降夏片山貞次郎と結婚。明治三十三年六月三日、長男達吉生まれる。明治四十年八月二日、長女總子生まれる。大正九年三月十四日片山貞次郎死去。（片山廣子年譜）（註④）

森於菟彦と三村夫人の散歩の場面

・私たちはとうとう村はづれの岐れの道まで來た。（略）あたかも私たちがそれを待ちでもしてゐたかのやうに、美しい虹がかすかに見えた。（「物語の女」）

・芥川龍之介書簡大正十三年八月十九日 輕井澤から 室生犀星宛  
けふ片山さんと「つるや」主人と追分へ行つた非常に落ちついた村だつた北國街道と東山道との分れる處へ來たら美しい虹が出た

森於克彦からの手紙

・然しこの頃の氣もちは反つて再び二十四五になつたやうな、何やら譯の分かぬ亢奮を感じてゐる位です。

殊にあの村はづれで御一緒に美しい虹を仰いだときは、本當にこれまで何やら行き詰まつてゐたやうで暗澹としてゐた私の氣もちも急に開けだしたやうな、氣がしました。(略)あの折、私は或る自叙傳風な小説のヒントまで得ました。(「物語の女」)

・芥川龍之介書簡大正十三年八月十九日 小穴隆一宛

僕は短篇を一つしか書かず、無暗に本をよんでゐるしかしもう一度廿五才になつたやうに興奮してゐる 事によると時候のせるかも知れない。事によると、何か書けるかも知れない

森於克彦が三村夫人に送つた恋愛詩

・二月の末、森さんがその年になつてから初めてのお手紙を下さつた。(略)それに何か雑誌の切り抜きやうなものと同封されてゐた(略)或る年上の女に與へられた一聯の戀愛詩のやうなものであつた。(「物語の女」)

・芥川龍之介「越びと」(旋頭歌二十五首)「明星」大正十四年三月  
むらぎものわがこころ知る人の戀しも。

み雪ふる越路のひとはわがこころ知る。

ひたぶるに昔くやしも、わがまかずして、

垂乳根の母となりけむ、昔くやしも。(「越しびと」より二首)

以上の事柄からも「物語の女」の中には、芥川の作品、書簡などの影響がみられることが確認できる。

「物語の女」研究 —— 片山廣子との関わりを中心に ——

二

片山廣子は、軽井沢で過ごした夏について、何か書き残してはいないだろうか。藤田福夫氏作成の「片山廣子年譜」(註④)によれば大正十一年十月号の「心の花」に「軽井沢にありて」(歌十二首)を発表しているが、それ以後昭和五年まで翻訳を中心に活動していたようである。しかし、昭和六年九月に「片山廣子集」(共編)が編まれ、その中に堀が「父への手紙」のメモに書き残した、「日中」を載せている。これについては、谷田昌平氏が「物語の女」の大正十四年の夏に当る箇所、片山廣子の「日中」の歌に詠まれた状況や雰囲気を織りこんだ部分がある(註⑤)と指摘しているように、「日中」を読んでいくと「物語の女」の内容と類似する歌が多く有るのがわかる。この「日中」は、片山廣子の第二歌集『野に住みて』(註⑥)の中の「軽井澤にありて」(大正十四年—昭和二十年)にまとめられており、「信濃追分にて」ということばが付け加えられている。「日中」の歌に該当する「物語の女」の本文を挙げてみる。

・かげもなくしろき路かな信濃なる追分のみちわかれぬに來つ

(「日中」)

・われら三人影もおとさぬ日中に立つて清水のながれを見てをる

(「日中」)

しかし丁度日ざかりで、砂の白く乾いた道の上には私たちの影はほとんど落ちない位だつた。

・日の照りのいちめんにおもし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむ

(「物語の女」)

れ  
〔日中〕

ところどころに馬糞が光つてゐた。さうしてその上にはいくつもの小さな蝶がむらがつてゐた。  
〔物語の女〕

• さびしさに壓されて人は眼をあはずもろこしの葉のまひるのひかり  
〔日中〕

私たちはときどき道ばたに立ち止まつて、去年と同じ唐黍畑だの豆畑だのを指しながら、さびしさうな笑顔を見せあつたりした。  
〔物語の女〕

• おのおの言ふことなく眺めたり村のなかよりひるの鐘鳴る  
〔日中〕

暫くの間、私たちはお互のことを忘れ合つたやうに、黙つて立ちつくしてゐた。そのとき村の中から正午を知らせる鐘の音がくつきりと聞こえてきた。  
〔物語の女〕

• 友だちら別れむとして草のなかのひるがほの花をみつけたるかな  
〔日中〕

そんな気がしながら、私はほんやりと私たちの足もとにたつた一輪ぼつかりとうす紅い花が咲いてゐるのを見つめてゐた。私は誰といふこともなしに「晝顔……」とささやいたやうな気がした。  
〔物語の女〕

「日中」の他にも「片山廣子集」に収められた中に、「物語の女」の内容と類似する歌を多く指摘することができる。また、第一歌集『翡翠』（註⑦）、第二歌集『野に住みて』についても同様のことがいえる。「翡翠」をA、「片山廣子集」をB、「野に住みて」をCと

して挙げてみる。

B 我さきに死なばさびしくおはさむとわかき日のわれは言ひけるもの  
〔一年を経て〕

• 實のところ、私はその時までお父様の方がお先き立ちなされようとは想像だにしてゐなかつた。そうして若い頃などは、私が先に死んでしまつたならば、お父様はどんなにお淋しいことだらうと、そのことばかり云ひ暮らしてゐた程であつた。  
〔物語の女〕

B イタリヤの古城に似たるさびしさの中に住むかなわがわかき子ら  
〔一年を経て〕

• そのうちにだんだん、古い城の中にも住んでゐるやうな寂しさが、私たちにひしひしと感じられて來た。  
〔物語の女〕

B 生きてあればのぞみもありとおほせつるその言葉さへむなしとおもふ  
〔一年を経て〕

• お父様がお亡くなりなされる前に、私に向つて「生きてゐたらお前にもまた何かの希望が出よう」と仰しやられたお言葉も、さういふ私にはただ空虚なものとしか思へなぬでいた。  
〔物語の女〕

A 山羊の子は流のふちの桑の葉もはみ飽きたるか我により来る  
• 流れのふちで桑の葉などを食べてゐた山羊の仔も、私たちの姿を見ると人なつこさうに近よつてきた。  
〔物語の女〕

おもひでの駿河

わが夫なくなりし大正九年には常のごとく輕井澤に避暑する氣力もなく心身よわりでありしを、人のすすめにより御殿場にゆきて七月八月を過ごしぬ。記憶すでにうすらぎてわが世の事とおぼえず、ただその夏の富士をかすかに思ひ出でて

C 山百合のあまりにほへば戸をあけて暗やみの中に香を流しやる

・「まあ、山百合がよくにほひますよ」と

すると、あの方もベッドから降りていらしつて、お前のとらになつた。

「私はどうもそれを嗅いでみると頭痛がしてくるんです」

「お母さんも、百合のにはひはお嫌ひよ」

「お母さんもね……」

(「物語の女」)

A 何を見るきのふも今日もをととひも此窓に椅子うつらうつらと

・この二三日で、ほんたうにすつかり秋めいて來てしまつた。朝など、かうして窓ぎはに一人きりで何んといふことなしに物思ひに耽つてゐると、向うの雜木林の間からこれまでではほんやりとしか見えなかつた山々の巒までが一つ一つくつきり見えてくるやうに、過ぎ去つた日々のとりのめない思ひ出が、その微細なものまで私に思ひ出されてくるやうな氣がする。が、それはそんな氣もちのするだけで、私のうちにはただ、何とも云ひやうのない悔いのやうなものが湧いてくるばかりだ。

(「物語の女」)

A わがのぞみ稲妻はしる遠空に見つと覺えて又やみになる

・日暮れどきなど、南の方でしきりなしに稲光がする。音もなく。私はほんやりと頬杖をついて、少女の頃よくさうする癖があつたやうに窓硝子に自分の額を押しつけながら、それを飽かずに眺めてゐる。痙攣的に目たたきをしてゐる、蒼ざめた一つの顔を硝子の向うに浮べながら……

(「物語の女」)

B 八月の空氣のなかに一ところわが心のまはり暗きかげあり

・その日からといふもの、私はあの方が私のまはりにお擴げになつた、見知らない、なんとなく胸苦しいやうな雰圍氣のなかに暮らした。

(「物語の女」)

B 靜脈のをぐろく見ゆるほそき手をひとりながむる日ぐれなりけり

・ああ、一ぺんにとしがとつてしまへるものなら……  
そんなことを半ば夢みながら、私はこの日頃、すこし前よりも瘦せ、靜脈のいくぶん浮きだしてきた自分の手をしげしげと見守つてゐることが多かつた。

(「物語の女」)

B 蜘蛛かろく風にふかれて落ちて來ぬわがまなざきに長くいとひき

・が、さうしていつまでもうつつたやうに、かすかに搖れ動いてゐる梢を見上げてゐると、いきなり私の眼の前に、蜘蛛が長く糸を

(「大森のうた」)

ひきながら落ちてきて、私をびつくりさせたりした。(「物語の女」)

Aひととせのある一時のわが迷ひくり返し見るまばたきのひま

・——やつとそれらしい自動車が猛烈な埃りを上げながら飛んで来た。その埃りを避けようとして、私たちはいそいで追ばたの中へはひつた。さうして私たちはそのまま草の中にお互にさも疲れたやうな顔つきをしながら突つ立つてゐた。私はその瞬間、去年矢張かうしてここにあの方と竝んで立つてゐたあの時からずつとそのまま立ち續けてゐるのではないだらうか、さうしてその間私は限りなく長い夢を見つづけてゐたのではないかしらと云ふ氣がふとした。

(「物語の女」)

ここから考えられることがいくつかある。まずその一つめは、片山廣子の歌集の中で「物語の女」の内容に深くかかわつていと思われるのは「片山廣子集」であるということ。この歌集は昭和六年九月に出版されたものであるから、堀が「物語の女」の執筆より以前に目にする事ができた可能性がある。次には、第一歌集『翡翠』は内容の面よりも三村夫人の内面や微妙な心の動きを創造する上で影響を与えたのではないかとすること。これは、内容が必ずしも合致するとはいえないが、心の不安定さ、女としての迷いを表現している部分において関わりがあるのではないかと考えられるからである。『翡翠』の序に佐々木信綱が、片山廣子のことばを挙げてゐる。

自分の歌は、たくみを捨てて、事物をありのままに感じたもの

でありたい。そして其感じを普通の人と共に分かつものでありたい。其ためには、美しい狭い詩歌の境を未練氣なく離れなければならぬ。これが自分の近頃切に感じてゐる点である。併しながら、この翡翠の歌の中には、現在のこの見地を目標として見れば、捨てなければならぬものも沢山ある。それを捨てなかつたのは、たとへ多少のたくみの交つた作であつても、狂熱と理智との争の濃き陰影を印して居る点に於いて、最も強く自分を現はしたもので、自分の身の半身の如くなつかに於いて、最も強く自分を現はしたものとて覚め得ざる心の姿、真面目なる女の内的生活の記録の一片、新しき道に出る記念。

堀は『翡翠』の中に、ここにいう▲狂熱と理智との争の濃き陰影▼を、▲覚めんとて覚め得ざる心の姿▼を見たのではないだらうか。片山廣子自身がいう「最も強く自分を現はしたもの」、(自分の身の半身の如くなつかしく思はれた)ものを、堀もまた受けとめたのであろう。『翡翠』の中には、迷い、夢、闇など、自身の内面の揺れ、苦悩をうたつた歌が多くある。そして、「物語の女」の内容を想起させるものとして挙げた歌にもそれを読み取ることができよう。

「A何を見るきのふも今日もをととひも此窓に椅子うつらうつら」とは、時間が止まつてしまつたようにほんやりとして物思いに沈んだ様子。「Aわがのぞみ稲妻はしる遠空に見つと覚えて又やみになる」は、稲妻の瞬間のきらめき、その稲妻のように一瞬間にあらわれたのぞみ。しかしそののぞみも稲妻のように空の闇に消え、自分の心の闇に葬られてしまふ。「Aひととせのある一時のわが迷ひ

くり返し見るまばたきのひま」も、ある一時の迷いが一瞬間によみがえる、迷いに囚われてしまう、このような「狂熱と理智との争の濃き陰影」を、「覚めんとして覚め得ざる心の姿」を「物語の女」である三村夫人の性情として描いていったと考えられるのである。

ここから、「鎌倉文庫版『菜穂子』あとがき」(註⑧)にいう(「老境に入らうとする前の、一婦人の、物静かな、品よくくすんだ感じの、ロマネスクな氣もち」も解釈できるのではないだろうか。この(ロマネスク)について、池内輝雄氏は(堀の常套句とも言えるもので、心理の屈折を意味する言葉)と捉え、(森の愛を受けとめかねて苦悩する三村夫人のつましやかでしかも陰影に富んだ愛の心理を描きだすこと)が「物語の女」の中心主題であるとしている。(註⑨)(ロマネスク)という言葉の本来の意味は、辞典的な解説を加えれば、小説のように、教奇であったり情熱的であったりするさま。小説的というものだ。この意味から(ロマネスクな氣もち)を、事実と虚構の入り交じった気持ちと捉えることができよう。この三村夫人の現実と虚構に揺れる心情が、「翡翠」の歌を手がかりにして作られていったのではないであろうか。

森からの好意をいくぶん物語りめかして解釈する三村夫人。物事を(理性)から感じとるはずの娘菜穂子が、しかし、森と三村夫人の微妙な愛の交わりを一番敏感に感じとっていたのである。三村夫人の手記には森から示される好意以上の感情と、それを敏感に感じとる菜穂子の嫉妬が語られている。しかし、そこに描かれる森や菜穂子の様子は、すべて三村夫人の心情のうえで事実であっても、第三者から見ればそれは事実と想像を交えた散文、所謂「物語」な

のである。その手記には森や菜穂子が与えた以上の苦悩を自らのなかに抱え、自身の作る「物語」のなかに埋没していく三村夫人の姿も同時に描かれているのである。このような三村夫人の迷いの姿を受けて、(理性)に優る菜穂子が女性としての感情に目覚めていく。しかし、ここではまだはつきりと自覚されてはいない。(何處へ行つていらしたの)という言葉によって、三村夫人に認識されるに留まる。

### 三

再び堀辰雄における(最初の人生)について考えてみたい。(この私の少年時の幸福な思ひ出と言へばその殆ど全部が此處に結びつけられてあるやうな高原)、『美しい村』での思い出は、幸福なだけでは終わらなかつた。それは、芥川龍之介の死による。芥川は(僕の眼を「死人の眼を閉ぢる」やうに静かにあけてくれました)、「芥川龍之介論」と堀はいう。その(眼)が開いたとき堀の(最初の人生)は、それまでとは別の意味をもつものとなっていく。芥川の死が、瞳れの眼で見つめていた片山廣子らを、芥川を失つたという苦悩を分かつ人として見つめたのである。その苦悩が、彼らにどんな影響を及ぼすかを、自分の受けた苦悩と共に見つめたのである。(最初の人生)の裏にあるそれぞれの苦しみ。芥川の片山廣子への恋愛の感情、それに気づきながらもどうともすることのできない片山廣子の苦悩。母と芥川の微妙な感情に気づいているかもしれない娘穂子、彼らとの交流に(花やかさ)、(幸福)を感じていた

少年堀辰雄。少年時の幸福な思い出は、芥川の死を通して見つめたとき別の意味をもつことになる。芥川の死が、各人が心のなかに秘めていた想いを意識の上に昇らせた。

「或阿呆の一生」や芥川の遺書にまで語られる「越び」と、「相聞」を眼にしたとき、堀は芥川の片山廣子への「恋愛」を確信しただろう。そして、堀にとっては芥川と片山廣子との恋愛ともとれる微妙な結びつきと、自身と總子との関係を「最初の人生」の中でどのように位置付けるかが一つの課題となったに違いない。そして、自身と總子との関係を「ルウベンスの偽畫」、「聖家族」を通して、「自分自身をはつきり識らうとする」ために、「小説のことなど」で語る「私小説」的方法で書き続けていたのである。しかし、モオリアツクの「作家と作中人物」は、「私はいままで好い氣になつて自分自身の物語、或ひはそれに似たものばかり書いてきた私自身がすこし腹立しくらゐる、（今のままでは、もうにつちもさつちも行けなくなつてゐる）」（小説のことなど）、ことを自覚させ、「物語の女」の執筆時において、堀は小説家としての方法の転換を余儀なくされているのである。自分の側から見つめていた芥川、片山廣子、娘總子を、（自分自身ではない或物の裡に自分を置いて書かうと試みた）のである。そして、「或物」として芥川の愛が向けられた片山廣子を選び、そこから憧れと苦痛をともなった「最初の人生」を見つめなおすのである。また、この試みは、後の王朝ものへと引き継がれ、『蜻蛉日記』の作者道綱母に（自分を苦しめた男をいまは反つて見下ろしてゐられるやうな、心の状態（「七つの手紙」）を与え、「かげろふの日記」、「ほととぎす」を、ついで、『更級日記』の作者昔

原孝標娘は（日本の女の誰でもがもつてゐる夢の純粹さ、その夢を夢と知つてしかもなほ夢みつつ、最初から詮めの姿態をとつて人生を受け容れようとする、その生き方の素直さ）（「姨捨記」）を持つ女として「姨捨」に描かれていくのである。

「物語の女」における三村夫人の（ロマネスクな氣もち）は、堀の人物造型とともにモデルである片山廣子自身が、そのような性質をもつていたと考えられる。堀は「狂熱と理智との争の濃き陰影」を、《覚めんとして覚め得ざる心の姿》を、片山廣子の歌から読み取つたのである。片山廣子と、彼女に惹かれた芥川龍之介らと共に過ごしたひと夏の想い出を、堀は片山廣子と彼女の歌を用い、歌から引き起こされる心理を膨らませていったのではないだろうか。そして、片山廣子の裡に入つていくことで、「最初の人生」を（靜かに見つめ）、それを小説化したのである。「物語の女」は、確かに芥川龍之介、片山廣子をモデルにしたといえるだろう。しかし、それは彼らの伝記的事実をそのまま描いたのではなく、芥川、片山の残した書簡、作品を、作家堀辰雄が独自に解釈、創造したものである。芥川龍之介も片山廣子もそれぞれの手で大正十三年、十四年の軽井沢の夏を書き残した。そして、堀辰雄も自身の見たもの、感じたことを芥川、片山の手によつた作品を媒介にして作品化した。そこに見られるのは、片山廣子の伝記的事実と歌を、その現実と虚構を（ロマネスク）化した《物語の女》三村夫人の迷いの姿だったのでないだろうか。



註及び参考文献

註① 新潮社版『聖家族』（昭和名作選集八）昭和十四年八月

註② 芥川龍之介「或阿呆の一生」「三十七越し人」

註③ 「片山廣子集」『現代短歌全集』第十九卷著者代表平野萬里

昭和六年九月改造社

註④ 藤田福夫「三訂・片山広子年譜」『相山國文学』第十三号  
山女学園大学国文学会

註⑤ 谷田昌平『物語の女』の背景——『一九二五年夏』をめぐって  
『四季派學会論集』平成五年三月

谷田氏は、「物語の女」の構想において、参考にしたと思われる「日中」の歌を六首挙げてゐる。

・日の照りのいちめんにし路のうへの馬糞にうごく青き蝶のむれ

・さびしさに壓されて人は眼をあはすもろこしの葉のまひるのひかり

・さびしさの大なる現はれの浅間やまさやかなりけふの青ぞらのなかに

・おのおのは言ふことなくて眺めたり村のなかよりひるの鐘鳴る

・友だちら別れむとして草のなかのひるがほの花をみつけたるかな

・風あらく大ぞらにこり澄みにけり山々にしろき卷雲をのこし

註⑥ 片山廣子『野に住みて』昭和二十九年一月第二書房

「物語の女」研究 —— 片山廣子との関わりを中心に ——

註⑦ 片山廣子『翡翠』（心の華叢書）大正五年三月東京堂『現代短歌全集』第三卷著者代表石樽千亦昭和五十六年八月筑摩書房

註⑧ 鎌倉文庫版『菜穂子』（現代文学選十二）昭和二十年十月

「楡の家」は二部から成る。その第一部だけは一九三四年の初秋、信濃追分で書いた「物語の女」といふ題で雑誌に出した。紫式部日記のなかにふと「物語の女のごちしたまへるかな……」といふ詞を見つけて、そんな題をつけた。その小説のなかで私の書かうとした、老境に入らうとする前の、一婦人の、物静かな、品よくくすんだ感じの、ロマネスクな氣もちと、その古びた日記の詞との間に、何となく互に通ふものが感ぜられたからである。

註⑨ 池内輝雄『鑑賞日本現代文学十八堀辰雄』昭和五十六年十一月角川書店

本文引用

『芥川龍之介全集』全十二卷昭和五十二年七月、昭和五十二年七月岩波書店

『堀辰雄全集』全八卷別巻二昭和五十二年五月、昭和五十五年十月筑摩書房